0-71 (済)

俳諧資料カード

年代	
編者（筆者）	[illegible]
書名	
備考	[illegible]

（下垣内蔵）

下垣内和人
〒737

源左衛門へ渡地方

壱畝田

同六合

六斗八升壱石

拾石

[illegible]

[illegible]

歌俳百人撰

花咲し人も蓮れ有す秋

秋風の心動きぬ縄すたれ

梅か香や其の家も恥かし

いかめしくも源平藤や花咲蔵

思ひ出す昔のさくらの庵ぞかし

身は是人の心残りは今のかな

此自由事人いふ小春そはしたる

明の月此身ならてのあなた杜若

烏露　嵐雪　其角　不角　貞佐　祇徳　米川　故一

留守にあれも人の出入すくなし　冠里
扇と花の浮世せん言葉哉　尾海
名月に庵あれ人を恋しやみ　楼川
草ぶしや夕まで吹風の音　乾朱
蜻蛉や去来してもとの枝　花波
海士が家は男ぶられ知らせつ紙のかず　里露
萩やあまりふめて翫しも見　視徳
御子を浪に知らせし東山哉　平砂
みりの子らうみ猿は子規　成風
花見か四つの図画の描きさ面　七九

秋の宵嫉しかりける膝これ　草素
子共らに蔓一ましの人手を　和代
西風に思ひ深山ほ珠見哉　西里
秋かりよ側す夏ゆつ毛すれ　老嵐
精出せそ出ありもの水車　蓮之
あまそ細く衣岸ほとをほけつる　垂月
猿も人く食しえささゆれ　信高
ほ鳴のちと鐵つて不跡哉　稿冬
蓑やさして好市付年ある事哉　美丈
無花菊とり朧合とかうけ持ちを　素堂

鹿の名を下すそのめの鹿の別　翠羽

武蔵野も森ちかくて月見哉　沾源

次第にもおと中程の御堂丁新　梧扇

葺替ぬめくるま哉鍾しき風川　嘯月庵

新名や鹿の別宗もなしうき　勝浩房

寒くゝ下ぬ風もうつゝ衆の新　玉城

ものゝしく露払き蛤めつ哉　房我

夕立や人去りてあとに月の宿　槌里

宿川のうそのうけ中のさとそうち　白鶉

巻軸
世ちかや一字ぬりの葉八新　季之

駄荷袋

飲食部

菜僕やあまりみせかのゝ門分けり　由折言

人忘れまて蔵て仕舞思ひの菜子　女 寄生

あらしやあ例のやも無汁　之和

あそゝ口ひとしの花子りけり　風輕

胡麻出る茶湯かすむ深き哉　女 葵丸

菓子てて菓子の白ひかる綿哉　かつら

杉菜るみな身々の菓子小板筆　秋晋

菓様のたへも焼しかぬ時ゝり　帝良
苗葉や粉粋遊び　田舎ゐり　桃野
まゝ味も足無宗藤煙もいもの　宗羽
拿領ゐ小襟者ちゝり焙海苔　全可
那のま水小唇さゝむ父梅見の粉　営杜
いなまのと袂ひらさまゐ紅の吐　惟子
酒まり乃側へ平しはしゑ麹武　鳥山
小町の朽和藤はかく酒せて冷し瓜　酒一
風あそと変喰揚ミ人声ありて　浮木
赤飯や画札ひと日ともまゐ之峰　菊庵

鮒の多ふ小わゐ風ふけるの闇の糀　女 杷琴
鯨汁と振舞人の為まし太乃り　閑山
麦冷しかくぬとまる吉まりけ　秀翁
神饌あまりそもむぶく粉理乃り　二柳
かくらかもそてつくかゝる海苔の雫粉　粗文
もしうきまそえて朽りゐ梓食　麟芝
喉くふもふと蒼芸まゐかや娩汁　枝玉
菓一枝酒し抹茶しふうて子　家宗
山里や蕨の一毛ふまくるゝ木條　月芳
壽の吐寸むけて対まり粉菓の子　蕾瑞

花盛りりつて春雨餅配り　梧十

埃もなく若葉てらう細汁　菊坡

風呂敷や何の涼しんと清字戸　丁知

鰈貫くふ肉まひうる鈎白の鮑　花蕪

手子鮎や汐行秋ともなき家　薫雨

尾花あちしわし見へて千弥子　修月

瀬々よとて花しめしくる紫式　荻悠

りうもふ小姉まていうえ小豆粥　小村

田まもむひて西しう稲子新蕎麦　春暁

月も日もいさんてくうき神和真　松什

白魚さとさゝへ孫着もさえんり　澗海

ひとつとれ紫解ちしれ根丁那　女 菊女

菜摘みもそれ咲き若菜の御汁　冬雪

まさしり神代見ゑてう営下雑　木公

たて切出ハ松風あし茶喰　一朝

翁の茶の此も用ふ集のかしさし哉

竹のみの秀き行って是すをかくく寸

字引わくとさるし酒の味　如無

わらしまり蛙鳴蝉しさし椿　冬舟

魚之日くそ是のゝ待菊ふりり　雪蕃

まつはふ山れ清水の味くらへ　吾丈

初月や和布鈴れ筆すゑる　谷詩

年毎にかはりてもかはる粽かな　稲雪

もみ嗅かりや又新の青の飯　女 魯吉

鴉かりのなて松をまけり菊哉　謝生

春雨の濡らしてくれる鉋の塩　臥鬼

あやしけに硯とりて紙生海嵐哉　荷歩

武総　彦

思ひけし鰻をそれもかゝり船　李鳥

花に酒濡れも菊もまたなしなる　吉積

田ざそもあらねて淋しや鯨の味　仁里

春の夜はこゝのかしこすゝ川鰹　如柳

雀過る松奥輝真はあらけり　左朗

歸帆　羽

寒さの月て珊瑚萩かりの英録　之羽異

菜の花に煙霧白ひ錦けり　又々

去秋てもの中まのしき川松魚　千宵

梅にて枝わもの気利那ち　吉鮮

上毛　信

雨やとうる飯の匙漬さす燕けり　竹涸

口きりやおもひ出すかへらぬ物の名　蕉人

懸しらぬ花のはゝのむかし年の暮　圭布

酒の中をたつしてひとり梅見哉　古翁

こりしく薬を知りて飲る新茶哉　淀恵

杉の葉なと捨らけてのむ清水かな　鶴村

世賊加

茶摘るなともえるもの知至りけり　古翁

男結ひ樫の時雨かひとり　桂巷

人の香に浮世のつゐる清水哉　嘉明

小鍋たてまつる知己の先漁師かな　想魚

萍の花摘むとして茶一杯　呉洋

咲ものを濡つきまとふ薄哉　蝸堂

染る日もりしきのあふれ無ちちや　乙良

猫の妻侍りしものゝきりけり　安雅

捨ひ来て色をあらふや雨殷もなし　ちうき

顔をみて寐るそ抱きも足らぬ鳥　竜見

またありし桜鉢の外を出ぬ桜　二之

高きせて捨けるまかね海苔の花　柳壺

甲相駿

鮎来るや酒も菜もさかなりけり　六堝

新たゝと選て喰かと情けり　野石

乳啜ひの記りて芹ぬ田植かな　槐堂

引名しくて咲くる茶漬もひけり　空頂

所々て面出しぬくや語切者　鈎堂

雲深了一把を比ほす粽可難　元緻

新緑人なりて出る新酒かな　伯耳

遠　三尾

目かくりれ来て傾城や小鮎汲　清阜

少て来る通りの新茶を出されけり　水竹

麻衣度まふ人こそ知とりぬ新茶食　寒鴻

黒うゝめや常住て新く喰けるなりせ　浪芝

もさらひすほし向くこそ海苔一把　黄山

勢　江城

京のめ産てのし看て茶以良　荘叟

小路低柳れ京席ぶ心音さけり　卜帽

ひと麻入しものしりや汁を汁　澈花

梅一下在すて新茶乃分けりる　桐下

家新待ち名のなし雑春や秋　石緻

遠国のいろして選る京かし　岳風

咲の菜り岸縁て行る庵々の花　元池

汐田ゝ日まし沾て居る龍の海苔　林居
ぬれて行く菫ゝ莇かゝや夕汐風　芳英

旅　丹摂紀

出替の婦居藤見よる日より　清滝
丹波を出て行くしく粽かな　闘丸
新程まで一痛あるや梅の花　月桂
精沿の絆なめる柑料理哉　竹岐
菊の花色あれは居藤のゝ田より　二笑
一跳そ行そうかゝり実新酒かな　閑羽

同　備藝

酒こ汁入り神の前の門　仙兄
葉四ことし八様のこゝろ新茶哉　平山
伊勢の新茶旅そたと逃けり　吾頂

阿縁土

古庵きて上りもちや餅の菓子　露泉
梅咲やともかなしく居様綱　升甫
川よりは鯉焼きや鳴子鳥　可鉄
新しく紀やしおけそ松の奥哉　左春
木戸の内てあやしいは濡ぬ燕子讃　素亭
庭もけて仮寝した榜乃明りうれ　蕎径

雑物にて木曽乃冬も補ひけり　英笠

青纈の葉に溜る川る霜かな　菫山雇

節季候

通りすきて跡はさひしき節季候　天出

揉手しても御礼は上手節季候　文尤

寒もありて のらりくらりと安葉瓜　赤鯨

解者とり猫の口ふさしき中すさい　笑道

水引の節もまじる小鍋の苔　和戎

あらしてや女の寒さも難所哉　卯角

東　舵日

君代の春の前ぶれけり屠蘇賣　仙翅

餝縄礼者かさなりけり押かさね　卜又栄

栄螺とも思ふ人あり薬喰　駝岳

衣品部

子等袖てん着て衣相ふるし文衣　（アフミ）虚白

来の子ら手ふりて世の夜うる衣　（アハ）風樓

松ハ見ぬちとあれ着るはりけ衣　（エツチウ）貞山

夜衣着る帽子かぶりかけり　（ムツ）晋支

一をの間に桜かでも世になく着る之　（イセ）柏一

衣の袖しまし智恵も出ぬ衣更　江戸 樹村

衣更さくらも今も[illegible]前は花の雲　上サ 羽人

袷衣や一枝あてゝ小袖もの[illegible]　江戸 藻岳

更衣てみ[illegible]衣々の袂　女 千指

小袖ものえひとりかくる袷でおかへす　真南

袷ぬぎて後や鶴引むし里屑　ナカサキ 雨荻

袷羽織小袷を着て行く袷衣　サカミ 仙雲

つきぬ袷の幸ひとつの川ちどり　サカミ 立宇

とく起て先さし袷を着て川袷　在京 梅堂

袷衣や身を売る妹の袖くれはつ衣　ムツ 仙孫

袖に袷縫うて母の手もとの[illegible]　江戸 天嶋

蒸ふく袷も一両ばかりの袷あさせ　[illegible]

うつ袷うち袷ぞせき袷哉　女 紫木

あさ雨ほるまで嫁の衣ちらし袷　下サ 紅芝

身ほ隠つて君が袷ますもの袷　カイ 花外

桃ちるや[illegible]袷の脇小袖　江戸 菜舟

むしかけ小袖若草も[illegible]　サガミ 静風

もちの草行手をしる小袖　カト 桂花

鴬の声きゝし似て孫のうな　十二ハ 許史

連て出る供にも着せる袷可哉　袖心

孫着る物見しとさとりけり　京 九哉

衣包ともにもちせぬ孫への車　下サ 井の

子供等や孫着すとくまふて　ムサシ 文渕

孫まして似て居る母の孫哉　葛西

屈りきて橋のわるゝ行すゑ哉　エチコ 菽村

老懐

ゐくとうしたちし出て居る孫の顔　呂叟

人の若きとみても嬉しき孫のかれ　等古

孫若て猫も眠らぬひとよかな　風村

若殿も冬中も森ぬ孫可哉　蔦芳

帆帰りや覚あそせぬ　吉山

種々や孫若るゆをとくすゝる　峡谷

垂孫の笑橋に出る行すゑ哉　半琢

登孫の教て若いる袷可那　東橋

小机に孫も又ぬくもあそせるな　祖白

悩みの若けり祝たりし日々寄度　風宜

かりひしや机に[illegible]きけり　女 柳也

惜しむや須磨の浦風吹通す　冬松

うらびしこちらかへりゆや子供達　上毛 西馬

惜しみの後見れありて出るしまで　ムサシ 竹山

われらに袖て取るる行過かも　素直

雨止て河原にちるる過る音　白鴎

袖風の中に八角のみのうえ　梅淡女

諺　中

雨しらいさらぬ新の袖かくし　雀翁

鬼灯の影色々りの妹か袖　雪とも

脱くくす袖ふる春の光哉　巴雪

袖は蝶結もまたやさうにする桜哉　平ノ 去園

若菜て先袖まつむ若葉かな　カヽ 年緒

そてのとうりて月をみのしかな　ムサシ 稚者

袖の香共しとそ出て拂ひけり　ノト 風分

ぬれけや袖のはちて春行かし　サカミ 舟光

袖の袖に花つゝしまる花のかな　上千コ 風眉

居るまもちや袖をみる年ぞかな　トサ 之桂

春めいてものみ住はまむ菜の羽織　来林

むかふ前まゝりまくはかまけれ　惟六

船苫へりまて落ちる露ありけり　山谷

驚かせとか先またちるはかなり識　誠斎

満田堤まて

宿の日や誰かはたりも絶の州　史来

柿子の露見て落ちる茄ほとり　ヲハリ 示扇

頭を把くてたゝしき蒼き識　鵬居

大岩もかゝりのもの気　蜩まて月　台ゝ

蜻蛉ゝとかつぎ出る海の舟まゝり　琴陵

あきかれて白つゆかゝる蜻蛉の羽　仁宝

蜻蛉の譲宝いとをハかへとめはしいへり　ミカハ 三岳

森ちらる蜻蛉も風かゝしつて　下モ 蓬外

ものゝそ蜩鳴る秋ちてつけり　シナノ 葛古

蜩鳴ぬうつりさえや夏のくれ　カヒ 風居

枳殻和蜩澄きかてまゝ秋ゝ　スルガ 瑞山

初ゑの川て鳴る庭飛て年の蜩　アハ 緑逸

はなふ秋の秋蜻蛉の月を追ふし　老　イセ 菜園

行灯やまとて仕舞ふる蜻蛉の外　エチコ 文宅

寺泊まて

蝋燭もまた風波まかするやとりかな　西睡

綴り縫ふ雪て散るる蝶々かな　一瓶

聴くことの画ふのうき蛤蜊哉　岳宝

音羽て吹ちられし蛾蝶哉　汁扇

羽衣こる蝶の舞ひ出ぬ男蝶かな　守一

秋作りやまぬ言の葉ことの　千魚

洞に出る鈴のむれこそやうかへぬ　月翠

上代のうくふ紙ふめの一帯　居文

羽衣の白妙と帯のしめん　菜秀

きぬかけや帯しるしさし小振袖　不二門（カハチ）

むしさたていつも色見夜の事　凡和（サカヒ）

梅か香れしして旅はのね猿すらも　雨重（チクゼン）

呼蝶ておしすも
けふのまぬけの穴や文夜　素元

花ぬる袖て見えまり穂乃とふく江　椿立

かしこの花ふれ上の花さきや梅のうち　山月（アハ）

十よし茶て折く春のさびしさよ　ムサシ 其角
出る茶も屛茶て出づゝ鶴行く鶴　、蕉笠
やよい世茶ものゝ付は締さるれ　チクコ 紫堂
うれものを茶て噴ゝのやしろ女　エト 伯遠
茶娘は噴茶て出立とんとは　シナノ 一花
萬入のまゝ道茶ふやそ三日の路　イセ 一遊
摘て来て締めしぬ萬の花　杜有
縫々子乃もうすみちらし内の秋　鳳伍
締茶は心への蕨行ふやかさりな　ムサシ 菊邑

締茶は風川とまうしたり若　正依
糸時の目は布かゝを通り茶摘は　乙旅
摘まれても仕茶や布かや杉の内　アフミ 若一
摘みうしし藤の身はまさるかとんに　シナノ 荷丁
中庸窓其坂の中になん梅の茶　シナノ 中節
摘むもの川を崩すかとられ　エチセン 串眠
世をいまる扇は合家も所のつかり　坑南
花上て足うくをこ鋪し残ふす海　オフミ 茶枕

蝉の声聲も合せ通しけり　ムサシ　天由

茸たけまで重ね消えし花中に　エチゴ　来山

たゆのるみのうちたゞのる頭巾哉　、　琇角

我家て子を若草や飲さうん哉　チクゼン　席聴

由まれて肉のうちからば渋んは　ヒゴ　虎月

風呂取りて若紙てあのる汗巾哉　五島　菜尾

若草のしほれてかゝる雲下事　イセ　菊石

果衣若て人すゑりれつれてつり　ムサシ　東ゝ

若て出猪い若々人まで行る湖夜哉　エト　蓼須

あらぬ鳥て宿をぬらし　ますゑやの花をつくそ　枝下手　果静

蝶狂て羽まてしかきかねそ哉　エチゴ　冬琴

居所部

春

春の朝出来のて是れつぬしし　晴しきのゝあけ中り　サツマ　山骨

人まつ朔日をうけて島の家　イヨ　卯角

もしろなき人音なしてもものゝかゝる　チクセン　宇甲

里の子のふりしりる雪わたる川　鳥　京　卓丈

つ旅つもとも神の前に大黒抔の事　エト　護物

二張てをおしかへけり神楽　スルガ　龍旦

盃掴み出て猫もうけりける日和　十二八　其山

風朗先生の精霊を
ゑりにやりとも暖しける

こゝもまゆ来て旅人なりの春　イヨ　常邦

福寿草座へ居れは光りけり朝日　イセ　雲丘

門松をおもしろかりるものしるへ　エト　文路

蓬莱や居ならへハ白の中にたてたる　ムツ　存可

ひとりして茶を置ける門の松　エト　徳丸

那一ツかけし松のうちもとりも　チクゴ　女　松代

採出して膳にすゑけり福寿草　ナカサキ　千江

門松に家ふして居て花の事　十二八　林曹

若菜の家の?物に添へ　上毛　一菊

蓬莱や寄出して並べ縄　アハ　万緑

門まつや皆正月もすさまり　ミノ　其年

花かしも梓桜に居りゝの事　ムサシ　紀一

松の間の墳をたてる鶴の丸　ナカサキ　舒桐

眉かくし出て摘ちらす若菜かな　英馬
菜花の麻ひしくやそよけの節　来向
中判のつ碇せて新らしく柳かな　呉雪
春の月薪四方すみちらしさくかな　錦枝女
衣と梅し記と何くもみや音るかな　花緑
月の夜さも梅さくれまいや春の嶋　貞宣

春興自画自賛

菜の花や行しまもれ春そうり　透渕
七宝さかり回しくれの浦の春　旅岸

横禅て見る春行ソ山悲楼　氷谷
鶯の梢やくもり降やけり　苗汁
地をあつすまわ庵乃春の雨　業居
春ゐる人のこと気有寺庭も山家哉　篤志
中の猫恋すうて新もせん　女 花乙
門口をかりて春すくし柳の中　松遊
春もわか新せぬのまかの柳　玉園
的まてき何まて庭と猫の恋　山外
菜入てあそか川て行る二羽の鳥　呂文
行麻的ちや角折をしける哉　松居

黄昏や顔に行袖に風のにほひ　逸山

若鮎のまよふ芦のすゝむ春の雨　女　秋嵐

蛙よりもまくら寄添や川の音　氷流

さゝけ梅に寄る庵のたまり水　中ハリ　桃雨

梅の花すゝきもうらゝの花　しナノ　悦径

門松に立派なも行で頭のえくる　定角

左日と風の浮のつる草の中　菜山

花風の雲ち舞し風根もえそうり　月井

梅のなみたの雨もあくとしくれ　エチコ　一葦人

鶯梅よりも雪の底にて海の底　小洋

奥の方を行ても梅の匂ひ哉　喜紋

夜川を乗ても行梅ゝ月　東川

梅の香や女の子も帝なる寺の鈴し　ミカハ　若村

春の夜は婚折りてたんの宿　山城　阜池

黄昏の色の縄に行は雷の光　左謎

日暮りの空は梅の花　エチコ　亭山

菅ても寸色来て行る藪の家　京　芹舎

黄の花の初音を鳴て行る影　アハ　葉棄

麻のもとの若菜もあり中盤々　イヨ　黒雅

料理待や小網ひ出ての春風　アキ　森峨

蕪の葉も打て居る仕舞哉　クルメ 馬朝

夜明も見えぬ古関の夢北府ス　イヨ 映門

漏桶まとく新元しる梅の梅　ヒコ 十朱

探りして何所へ行く梅の宿　日向 双延

掃よしよて申る居ぬ柳かな　ヲハリ 一清

庭の雪待切る庭の門の夢　芝石

きよ雨や路次のしまる庭掃除　エト 當寅

梅の子や庭して見しぬ庭の梅　梅七

読つゝ節しく隣花の言ひ切り　充丘

挑燈に路次戸や檯ま書北月　ヲハリ 蕢道

節よの門も見え猫て来る梅の宿　エト 仙庖

御の家や志らし梅よ音ま冬　資喬

夜つむきのよしみ月風やふめのむ　アフミ 衛文

初午や葉さけらしさひと権　ムサシ 秀枕

下店のたしよまよう庭の昔　上毛 節吾

妻の弁てる庭ものそ二眺哉　雷村

入鏡り嬉しきて舞よ中の哉　ムツ 心阿

付の影て衛月何り枕もと　東明

雪とけやつくまゝのつる川　たよ

初空や見ん月かくしよその空　余風

連翹や芦摘の乙女ある梅の先　テハ 也之

昼さへの日和を蝶のみたれけり　ムサシ 式よし

みの行るとうしやすれたり梅の門　カヒ 欽哉

鶯はなかぬ枝もまたや柳の添　二原

猫庭に座敷にのこる尾もなけり　サカミ 白嶺

又来るとおもふ与の遠さかると啼て　牛羽

啼止んて雲ゐる遊ふ新樹の羽　白羽

梅の花鳴も晴もなかりけり　京 若濤

恋猫や啼さかりても用て外　スルカ 連巴

みな拝む鋒先の利ぬ白の尾　テハ 化鵬

清うして枝さへきれけり梅の匂　エト 米山

こんとろせて花の中ある草の柳　来賀

花の日暮り鷹の替りの菓子かな　箕巖

二階より人をまかせん雛のかゝり　枝園

かくれ家のあるく独活の世なし桜哉　外濤

蓑笠に濡れとり濡れて桃の花　ムサシ 卯月

ふり袖もし雛もありける草の家　玉芝

庭や北にとり花見の里　シナノ 葵蓮

定まりて桜も咲ぬ庭の花　布音

雛の宿われとまゝすて折の月　義

あらしさへまた折々ぬれてくもり哉　姫山

ありあけの住よ前の橋もとくら　杜鶴

同

夏

梅のしも足かぬ庵の蔵のみな　潤長

行平の画に讃す

かり衣は雲か花かる浦波の中　竜風

四阿は風かれの庵何ありし　四山

山寺の中宝寿精舎にて

蓮かけてやすめのりかな

ゆかしさぞ人のまつえて蓮のたね　閑二

天井に顔もあかせまつかうち雲　後素

ひとりまてや門へ出掛るむしくら哉　寉秋

鶯の音も連て来ぬ八谷の泉　唐人

一川花蝶に眠のつくき院の松　雨兆

其後も用かき戸をそよの鳥　紫遊

たましひの萌ゆるも涼しうる宿の雨　朶丈

苗茶や佛ろうも下戸の網　壷天

まつの鶏の廟に眠るうつ蟲の蓑　松明

門の外のひるまや蓮行や絶　石水

裏表す物し遠入やせ庭に　麻吏

石経書字
わこきれ札押出る虫の上　一具

ふとをきつゝ雨に柳のわしこれ　樸翁

乏中の花散りよくし夜々遠　ムサシ 秋暁

菫の蝶の押行ゆて居る夜明に　上毛 沙来

観潮る身のひとつわ句つ守　松藩

花まも涼しや庭の揮ちより　正千り 大阪

籠物の二折並んで花以て　魚動里

慎名の門と綿家して戻りけり　シナ 敬甫

あらんあるまく流れし清あり事　ムツ 含閑

見るも揺と涼しくも所業二階かな　山亭

去きる笑顔見なり料理茶屋　サト 文仙

秋ふきうゆくて折ゆくる庵の夕　ノト 法淵

むらい月生る寿令門涼こ　京 柳緑

虫行くのと紅道も恋あるの富　梅恵

遠きしぬれ行る枝かゆ虫の木　十二八 婦兄

風振るの中く涼しき雨かな　アハ 雲二

蚊折かゆ墻おしよって萌へのれ　サヌキ 烏谷

虫のぬ紙ささって涼し雨れ行　滝渕

戸の明くとまつ川[illegible]の[illegible]　亨之（ヒウガ）

[illegible]をまちいそ[illegible]　箕人（イヨ）

二階まで[illegible]の[illegible]風　都水（エチゴ）

ひとりまで庭一つ[illegible]　和宿（スルガ）

戸[illegible]の月　海玉

[illegible]門で[illegible]　仙菓

書院まで[illegible]牡丹　鷹雀

[illegible]の[illegible]二階[illegible]　勝良（カイ）

[illegible]図雨の[illegible]　鱗角（サカミ）

[illegible]徽雨の[illegible]　法潤

[illegible]　対笠

同

秋

[illegible]の月　一鳥（ハリマ）

[illegible]猫　蛙年（京）

[illegible]　造芝（サカミ）

[illegible]　呂丁

[illegible]　無青（アワ）

[illegible]　一芽（カイ）

[illegible]　仙壺（スルガ）

七夕比まのかゝる外や桝棚　クルメ 麦又

光りたゝの影しれやしく山の露　サカミ 年保

萬かくしも見ゆる汁仰りてみれ川　カイ 吉亮

押入道の蠟燭もちし紀秋思ひ　京 素紀

洞して八朔見る子穢家の事　エト 河梁

秋の初れもつやし紀まのし拍哉　サヌキ 箕雅

行倒も露根す日の何り秋の風　スルカ 了琴

晦日月やまた晦して盆門の草　京 首節

神酒やた皆す路しるえ搔れ先　イナハ 寸風

物わしく人の行列て四方の帖うね　ハリマ 単麦

戸ゆくれ純く風小京まゝる乎如ち哉　シナノ 茶介

人も衛すりみれ理もふも帖す稲　上毛 介庵

家ぬら何行も近てもりふる佛のまう　吉升

ともやちり批出人す列て葛る餘　クルメ 山公

内行うみて請もち行れゝ秋患く純　下毛 嵐翁

蓮の暑や廣いるつもく庵上下　エト 千角

宵の亦ゐ逃ミて如庭わこくの屯　仙塢

鈴出や請く供も大すゞ遠ふ　洞文

人すもやも依如彩色の露弥れ　波同

記くも菓すきゝ依乃あうしね宿　恭家

釣らぬ大坂を顧りたそし哉　五株

奥林にても分の花匂ふ葉の花　東園

何かある笑ふ世の中枝家れ　速流

八と梅汁も往けの勢とほして
あまり行く今も見え三月日

梅も分き花を見て秋て庭の葉　ムサシ 壽之

二株いつ世無花緒て見ゆる分梨　サカミ 一株

清のしても人葉の白ひの谷　イセ 六松

藤ある門の和きかも葉緑の花　スルガ サカト 轉車

鳴出き花ともすや柳の風　東輝

きつ蘇かの行つても氣色の緑ひ吐露　エチゴ 家 エト 孫

菜のにお蘇も鳴人きりく人　エト 魯心

分のねして花の無の分や菰の宿　ミカハ 完伍

同

冬

風と分り奴據附る戸の邊月　スルガ 速山

門戸さ月とまっけて花掃　丹枯

據安の庭掃ちうる小春の雨　朱居

文付敷戸を川かけて静九り　佃生

まぬ日年く二往竹十御ゆ　宥鱗

焼さへも咲風かし鶯の声　（ミノ）可大

松建て門の出かゝる扇の風　天姓

咲出の時[illegible]らぬらし椿　庸芳

の[illegible]柳[illegible]の出すりけり　（イツ）御霊

[illegible]しく蝶帰り出れ[illegible]　（ヲハリ）家意

出遊人[illegible]て[illegible]も[illegible]の[illegible]　（京）自淀

[illegible]ひかり[illegible]氷[illegible]の内　（ビゼン）稲卜

蝶ひとり[illegible]ぬ[illegible]　（アハ）庶吏

[illegible]中[illegible]として[illegible]　（サルヤ）波文

[illegible]の[illegible]て[illegible]門の[illegible]　（サヌキ）五蕉

ひよ[illegible]梅[illegible]雀[illegible]　（ミナノ）梅垄

梅のかたみ[illegible]氷　其山

[illegible]て[illegible]の[illegible]　（エチコ）梅亭

梅も[illegible]あり[illegible]の入　（上サ）其葉

案門[illegible]て[illegible]　（下サ）写山段

中の風[illegible]の[illegible]も[illegible]葉　雁羽

[illegible]ある[illegible]て[illegible]巨[illegible]の[illegible]　（サカミ）葉沙

出[illegible]も一日[illegible]し　如之

鹿の[illegible]梅[illegible]て[illegible]しけり　（ムサシ）五波

清[illegible]て[illegible]て[illegible]　紅葉

折〻まるゝ傳ふやる時雨かな　蕭之
虫ゐきて風をもり行くの花見るや　涼松
もゝ流るつもりの家や嫁さかし　素蹊
花入ても久しき門より袖柳　梅令
袖はよく扶ひ吹風も身にしみる　小紫
砕けをのゝひくき船すり時雨濡　千春
戸を明て見いといふ夜の九雪　月蛍
葛ゝゝ雪ゆくもらしむ新酒かな　抱縁
樹に菜花ともす麻に行津る
居所の営まあつるゝ見ゆはまゝのす

咲きし紙に手の袖ゆうしき菊の香哉　御路
待く日て乞ふ咲くる柳の形　雨后
竹も言うてたゝしね月影夜の花　月夜
得るやや葉ゝの青き草て花の雨　竜宇
一吹に風かくれ花葉ゝ可哉　石芹
若ゝの声のして流る夜雨哉　六蝶
見て居れは網のあとまでけり　葉舟
又花あかまの葉あゝもたりけり　東宇
引かけて梅白いすや風の糸　石野
想う見とうけて蕨折り柏一葉　具識

ひらきけて風には葉のゆかりやめ也　昌風

鶯も出るむやこゝに梅の花　梅嵯

ちりの入る手の指ひらく栢ひと葉　方汀

わのつかはりとし梅きのひとへ哉　叙白

革も刻や植て見よ葉の句に花ぞ咲　孚府

もとめてそれしき見きは出ひとつ草　布山

結風にゆきのしけり梅をやし　白臺

手廣も東風のゆらん磨のうなき　流芳

うら結しけて出て見て梅そ哉　助披嶺

ふりのひらく梢けのしまね舞の露　杜蘅

白きかれ花梅もて一入何られなさ　アフミ 納江

二三人ともや寄て庭に眺梅られ　鳴磨

ちる花は八重も一重も見分かけり　四甫

何気なく来てさ花みむ荏の中　蔭坤

山寺花の一輪うけれる御出屋哉　蔦雨

中ゝに梅で桜も見くまる桜丁稚　山シロ 九角

山の井や野寺の柳もえぬ見し　梅績

梅咲し山からそのりくもせし　雨聲

坂句くのまわりて見てのくるまで　文翠

軒にはやまにてをかる春のあり眺め梅　セツ 自楽

をられぬハつれなし梅の行ひとなやし　松嶋

青月も涼しけるのさまし竹　五韻

菜やまぬ前の田のかゝり月と梅　素庭

ひ比とたるのたえまの松忘る　佳峰

夏草の野らのいくし日まもかな　此山

ひと筆につゝしの影に若やとし下　黄瓏

渡ちの舟千近よ秋への北ふの車　（アハチ）菊池

人あめ縄ふ竹の梅さるの樹哉　（トサ）嵐夕

梅しても山とゝふ哉ゝ秋さゝし　（イヨ）化羿

御寒さらて宝けかれり雪哉　女　葡園

紅梅やくれる菜とも新しい時に　茶鉄

菫や照り蛸かしのものゝ出来　太英

松川にまなふてのり此ちのしれ　（ナコ?）沙方

はしらを眺まさ渡しまるもる　鷺風

我比根の遠の頃湊や来の雪　（ビゼン）涼坪

続んでも柳とかしてわたまきかり　（チクゴ）鳥仁

ままかけて咲て暮も川如道の花　石風

菜の花も此柳のもゆさん白ひ哉　（チクゼン）宇逸

春の倒すえてあへあり如く妻風　仏涉

咲まりり新も見事も梅の香　（ヒコ）青年

ひとくりまでもおしむ野花の露　ヒゼン 惟く
急ぐ旅るのもゐのうりめぐる花　野径
旅寝するやてのくと日のあける　眉山
秋の夜の影く無事なる露　サツマ女 千歳
ゆるきれ実もとおもふさくらかな　日向 子林
菜の花の川筋に来る夕かな　エチゴ 宇弘
ひとあれ門出てみる桜の錦　素泉
神風に思ふ戦ふ松の波　奔峰
草紙の影も五月晴かし　菫水
菜の花とゐり過ぬ日の長閑　松風

枝ぶりに暮れそのけて夢がり杜若　松窓
杜若とて標ても菓子白める　テハ 二丘
世の中やものせそ行く身の緑　玄子
影のわかや葉も擬かもたねかな　夾桃
蝶も出る一すゝ日和や旅枝る　雪貞
又入るてなんぞかわある秋の舟　里境
細一筋ならかまりけ花の末　清風
水のはしえしい堂かりを眼鏡　ムツ 崔吟
三もしやとかりく御る柳は　西嶽
かなた絵の世なる此扇の中　東暁

隣から梅咲くの世の匂ひけり吹　立先

鶯や竹の雨にも匂ひ出にけり　栗人

ゆふへ迄花の咲日や餘の花　梅嶺

井の春や出て一ぬしき　赤人

梅の香や花しやまふ花けり　春暎

さいの上咲て立暮の薗　荒雪

一めつりやも日なるもてくされ　且松

ゐまきや折く沙し翔る坂　枹布

あこのきう技て見ゆる芝かな　墨平

純の山とく鐘あさ神て咲まさ（道）　竹心

梅花く見て花の露をそへけり　赤笠

よそくしまことは梅花かな　凡沙

椿て中より出ても甘ぬ行をそめけり　梅雪

蕾て雨も降ほしまりや手咲き　重雲

鶯をそられ梅で咲てけり　素扇

芳まさ天ひや月夜のとも咲き　木公

赤いとて見ゆしるのつくしかな　貫孫

水鶏乃なくあらし九月哉　百貞

三ましう梅の御の菜　学右

東都

静さの行やうて節く柳かな　雪可

咲頃も湖のうらおり梅咲す　大之

ふるくまあるか法や七色梅の花　念々

人去て花もちりやさむ木の芽れ　栄三

すの梅しもまき鶏おあり梅の花　夷刈

春もるとつひて見そる梅みかな　五調

梅咲りさしても寒し手細り　連志

見かるせり細も黄鳥氷日和かな　女　里恙

田と川くたかりたつて柳かな　氷壺

添ひしきか咲る河やめのくれ一所　溶々

探合せと細し出づる花見かな　釜吏

海寺とさきくの花かうかうり　貞承

あうゑ花の山の雲れ節きもり　鬼柳

菜の花やとこゝあうし湖りな　良台

和の宿うをう見事ら人かり　唆洲

をあれの名むしのうあ守む花の宿　紫山

院つけてかく暮れまや津くし　真鳥

申夕方つて桜のうぶくま花見　氷由

薪花乃小ゝみ浮か花つまえ　花舟

たの菜了勝すすの雲る人もなし　女　葉松

花に来て鶯見えてくるゝかな　花島
返りみれはけてある柳　東一
若草や樹の流雨れうて流　秀鳥
梅に月日風に行かれとしに　貞可
くれていつてまめのしけり十日菊　文静
並松のかくて涼し富士の山　雪吐
蔓かかるいさ花のあり秋海棠　梅望
若草や牛も渇り　古喜
鶺鴒も見ゆる牡丹に　力士　蕊鳥
何と見るとかくて梅薫る　橋

四つ橋や蛍のやうにかゝりて　女　野縁
梅や四流る花あらす　大井
あけかり梅に　粗扇
雁の春を梅の　範成
梅の幹に苔　浜扇
藤の下　宜菜
小祠の咲　梅青
梅杖の新　女　吉竹や
隹　作　卓郎
梅のあり遠入る梅の花　蔥畝

風と月のちりのこと流れかあふきかな　尼 知雲
柳にも風のふけりうつる鶴の澤　月人
雲たへてこゝろの芽出し柳哉　竹鉄庵
ゆう影とおもて遠しや柳かけ　大鵬
花の咲木々のまだ芽て仕舞けり　春雀
国ふりにかゝり言
梢も花も帯とものもや梅初め　風外
一輪の梅咲てい雨ゝのけり　藻心
千鶴の雲もそ白に行寒き中　一瓶

冬こもりしゝは秋にけり一夜ふけ　恰々
山茶花の二葉たゝくてちられけり　琴舎
陽くとゝえられは開も梅けり　芳里
ほくくと雪より秋や秋の路けれ　錦翁
木の移り茂て仕舞ふさくらかな　塊貝
雨に梅のゝさして菜の花　百和
伸ひて摘み合つゝ菜の中　一茶
十節にもたゝて床添る柳かな　坎巣
寒稽古流し此の元白しけり　永久
満河に舟行くもうきとる蔵かな　野堂

かるかや時ずり根ともの花の峯　月宮
草光と鶴北の月のあるありの　風郎
まいのも葉代の春秋玄鳥半　李濩

義仲古集序　乾

今年ハ寛政乙卯伊勢其外熱海
平治せむと旅立きけるにまかりけ
箱根路を越りておなし掛乃菩薩
満足げの上時ずはのするまゝて旅の
心あそびて彼是をかのかのかな
いくれとも知らず雨ていたしちけるに
し葉あそびの如くしてとはりしてこそ文の
筆の心のあらてかくあるまゝやと記之

扨ゆるかまは内木椊にして巣ありていかゝ
なりとゆへに鴨のやうに魚とるとの故なき
かあれハあのかしこきるものゝものをそ
いふみそしれそらつはぢありてさうてハ
高佐木の扇ことまかなくハうなきつけ
飯といふすのみでひしるをわけかといひあれ
いかにもあの島さへのよふしてあゝめり
魚をつかみたゝむしまゝ岩あたを海藻
草の下に隠しおくをあみあれて浦人
取とり出てめでたや喜びさつれとゐなん

それ神とも云ふは日々にて魚をとつて
ふたゝびあきとも人はのこれやかれて
それの村ハ豆の味ハいともふぬき帝も喰ひ
井くり人のゆゑみの渡へてもいつも
まゝ神で貧しきとぞ喜ぶるまつりそ
ほくにあらかいそのうちあそくけるゝ
御くり豆をかけりとおもわるゝ言さて
かけりと地をふくりを他句をおもひけたく
それあれとも自らさうしさて味ひをもちて
あまく彼浦人の飯つくりつゝあるとて

二三乃風古く移りとくれて好し捨し
とさうせられたきハいとし能しやうも
昔しゝも法若家の風体ゝますの世そ
詞詞をそひ甚んをゆて記すへし
唯ゝし我と味ハ句々のよしもあしへと
一ツの算すたくさへしを風ゟ人もて
句ゝ口切何る也あき秋一盃のさうな
ともは具合しゅく如し

雪水軒栄都

拙集所々ニ承蘆詞花ニ葉あり何へて自謙
又何ゝ作是承意を用ひ人撰ゟの我風体せ
たきハ也
数句のうちゝて我ゟもんをひねもか
のうぬとをも又えらひすまのせり
家々句古語まゝものあしゝいくら人ゟ
あうそハ業説多くして句々のむるを
まりのひとかけらハ古人の情をかり
て言葉ゝつゝぬうくものゝつまりるへし
集中ゝ字をましても句少あらもあきと

彼眼鏡かけてよく見れハ史保して
いひける人と前擔まとりてそ侍り
せしぬ
撲志の風まちく御れハ遠鏡の好士
うりまもて神まも知りせまほしくて
千傳よ出来しね思案ん人乃うは
来まハ彩る風流ありけ人こハのる
ぶつしき所りて眼くしくあ給もて
そ神そ平の可のハ出眼く人ぬ

茶静

きも名も巌と
知りあん竹て目離
た御代外くは架
えりやわきあをあも其中生す念

かミおろし泥

秋さり日の暗さりれをあきた家

かほ追

京まての縁あ十年に

梢んとゆらし　鶴

あらしとや

翠簾おろし起やら雪の羽音哉

ふり見て仏雄

蝶飛や縁にも雨ぞ蜻蛉のちち

衰月さく命あれ雛の貞

大和多木の湖月

やまふして顔中ももなし二月のぬ

たゆりわかれけり

香をしるし 烏鷺 大鳥飛そ 渡る之 縁

色不易

ちよの縁 し亀をいはひてはのみえ

鶴の子 鳥かきて 月影 寄かも 棲む哉

大流り

ちるや花は身を消ゆらん

花散れちるを待て 海へて

能なかれやもかくかな

得もとらで 田 か散りて おもひきも 鶴

大極生 壽 同意

右同撰の草のをもて あまた 撰

乃雪あり重子して 其 撰 集

みゆる再撰をもちひ のとおもひ 人

事ニ而ニ書ちうき 橘いかんの
せんさう称と切ふ志のてかしつくて
あのくかくかく撰み句殊をえ
りて寸手実も品句あて詠しと
是とさかつ
十六日ヶ路を早申春書春菓は書
於井樓学庵

南芝林

ほととまかりに時のちるくなる
まき海しきあとう庭の白牡丹
殿にあなて蝶しき母の許への信紙
岩頃も了殿はこめつし書写しる
備前上人近作
ちらと紀来言高き松乃薦気あり

藤浪とともにれて毛し慕あるへき
かなしの手まきみゆる二階の奈
家の知や絹衣ゝしもかた衣し
山さとゝハ閉れぬすゝも
嫁しとの事て栈閉しなくさりしと

壷坂寺

暑さ日や鼻ほと奈良傳ふら
暑の影まて何つきとかへせと
いきれて
岩萬流たる中かゝりもお撲とこと
秋ちらりく木の葉の粉衣かゝりと

刈者

英帆

暮秋

梅折て跡もうれしの叢哉

また柳乃青みて残し染なりき

渇子うく月は世にも錦かく

春あるく秋の暮るゝ哉来乃娥

秋林乃一様にそろひ之にの月

一　七夕や芝柏のめくりもちひ

松はやまみとゞ芸ならもと

こゝろれける

せうろ代しき秋乃代松を仮をも欲

浮あまりて錦の手つもりや其面影

葉錦のめでし其秋此頃を書残

してひさうすむしてまくらる

ミ白髭のたゝゐのかをもしろさは
雁かね空の音をもすゝて
作のゝのかゝる様をとうしえ隅田
柳にまくて走りしとゝる幽ま
乃雪ちゝこちむのしのあはれ
とゝのたちも三日月ゝまゝ秋深
一條とちゝせ影にゝ舟切まと
ほ出て稲まうし酒宴のひとつとわ
けもむ必つの粉雪ゝもゆるしと
まちもしもゝ四ら家ゝいとあかし

人さゝは情さへ出るのやゝれてき
程ゝ心のよれ雨をとうゝ人

藍學寺池

うゝむまとゝ光るとゝめり氷のこ
羊ぬゝちゝのうぬ山乃はなる雪
湖とゑゝる書院の二月うな

月入て更に何ゝ見るゝ湖水哉
竹ともさし出る枝もやせん拾よの花

於蜀流のはまかれくも見えし
翁の風躰を的として的ひき的
眼をつけるは何の執りといふ事
は翁の貴ぶ第一義はこの心映
か御下行上みえとして春の発句数
萬をいひけるの達人に評を求む

かの流のまなひに從ひ大都の
美名をうちすてゝわきまへ難きを
旅にもて眼をつけて道に時ゝ所建
何の感し一事尊庄の一言かつ述る
といふ

蔦土庄

秋了のよみ雨にそゝや露の玉
甚何とうし我心こゝ

晩鐘も光りあまるの月
ゆ仙かめる哉

我人たのみてもちちゝは蕊の飛
生心

伴吹枝の扇とゝ風の月のつゆ
新しし[?]あ仙 日心

秋風や菊人はこむいきし舟
吾はんつくるり妬し

あけ風をみてあら浮のつゆ飛ふ秋
常静なる梅の枯稗は巨のよみもさ年
かゝん

稚しうるの羽しくある夜ふく哉
宗雪坊
水今日ゆめしく

芦わ家の日し静かは風ゝ見
よすひに寂しみれ

無月や林にうの無くりて
さそしれあいわするゝ

正月も深くそれ飾れこそれ
季鳩

引野の立りあるらんとこの筆
　蕉風は柳のところなり
若ん附のあけて花ぞ秋の暮
　紅前しきるらしかさと兄人分と
　評者十分と

鹿の声かくへ奥さ向ひてまするの意
　江戸のむかしも京氏の句は何ともなくて
　いとあはれなる第とゆうる入るく蕉門の
　ほまれ

我庵の雨の風へ入庵の波
　評云こ好める新しさの背といふを
　也下なる句し

呼子鳥はるかに沖の藤はちる
　名杜若ちとりさ雪のこゑ遠く聞ゆるし
　まほまし

暮かゝる清水は女郎花や小たらし句ぞ
　三角の柳を植しかまはしや

宵月の露を残しぬ野萩にて
　幾里をとてて夕くれとつゝて吟く
　前句の後との意

涼しさや松に風入るたゆみなき
　宗は爾来のとおもしものゝ

右評

文政四辛巳年春

大雀菴塊 公羽

てのひらにまてもみてや百物のも
事ゝの首て出しひおこそ尤もしろ
大きりやひとり耕まて瀬の縁
日ゝさかや小水ひらうすと山霧障る
君しらわ相生の済めを出す中の余し

八の宅
雪中庵

すのをしゝけも分きと草さ此ゝも也
ちうの体ゆくのしやましうえて所とゝゝ
所月中
与孫し済し雲ゝ川門の精
わゝ草紙済てゝゝる山の一の
叢了句り何志咲ゝ消ゝゝ
孫ひゝもを
白波とゝゝちる梅の清見寺
くれとあゝゝあゝれぬるそのを
梅のちゝゝ柿しかりひし

三代のさかへ先にけしてよりかく
浮雲のくもりは吉野山
身にしみ入るる露にぬる須磨の松
山椒やまきの葉落て青き院
藤の花にほひけて朝日三上山
夜庵甘楽比良川石傍ら
松の梢ふとつるみて雲の峰

鴨啼てさらさら男人の老てより
田舎庵の名ある所を題として
秀才拾伝して
維帰て菜菓こなしにしてよりの谷
何ことえて来り人としる山里
道家物しもあはれなり結ぶ
やりくへ咲菊我無日もとりまし
露結ひて苔むしとつまかれ初霜
嵯峨えゆく栖ある人ぬけて初め山

右は事をかゝるの句
此中より撰てしるして
新國作りしと
書いたね

田喜庵
護也

ろ人飛花説

菊さらりれかたれへとのふ由郎れにて
年くて寒てこしとかりし首をす
嘲弱れも山榁のあれ之不ゆり
咲の酒をふるゝとり姫をゝ我
其たかとゝあ秋の會あへ寄の神ゆく

西やこゝや浮路余りけ守每一家
御とおそ言霊やまりの下
也りそ鯉のむしろやのれうね
ちの論もてあらふしく来たり
多路も寺中ま遍月にを為ふ
並しつかし

了翁人 書

誹諧師のたび旅まてや意をたれ
西人に我是れけも是くて山の音
是ちけくと我目もおり男うる
夢をまり是一めすみてけれ
何の舟も形くて是りうて那
埋中まに形まもりり出もうも云
なり

春風は庭の笑ひとなるに二葉かな

梅折れは笑ふなり也山路のつゆ

月のゝまゝ去清也ゝ二ゝうるは

つゝくねとおもふてやゝて春の山

游絲也晴て相去に河の辺

月夜のまた宮なるにも若菜の中

来る春の世はゆくしゝう事の那

前書略

置て見る生類の果てられ

撰集の花すゝきに　二日　発

繁荷ある杯の淵ゝ河ある日代

花に泉に身そめ松の香　例汁

山根垣る謙その中は春の白年

ひかえそのんれしゝゝ月さうへん々

淋しさの花に紅葉に　松桜

門こゝろ丹井のうちまゐ　ともら給

御製にあり始まりいく代の艸の原

あまといふ所に十抱あまりの
大樹のいく歳か経ぬらん下枝を
折てうろありける内の広さ
まし慈尺をも覆へるあまりと
里人のかたるをきゝて

楠をかくれりお　乱雪

前花はそのかもす露し　松に露

艸の葉あかく雑折すのやまふき

日を写しもなるる

艶に麻くともみえて乳のやまれ

浜清に綾を捨るる　一扇　入

夏雨や独身もかしの蝶名折

秋ののの見まむしすまてのすみ

ゑのむしとり延命寺理てしを拵へ候
あるもそうにて富てこれやうこそ蔵あり
物ゑしみうらり蔵し明暮のうち
明暮ても教ゑの御教第一ハおとし
精出すり清書ハ念入すきこなし
吉さへのえうをし指南すまし
雛のゆへまこと入すゑ手本の教ゆ

りくのぬまとへ入りこし小田の露
落まつけても相手こそ其の
手あれこそ世のしまり
稽古しめ言へるおとまず
はしきは春あれ再見の巻る
思ふこくぬる教も一段にまし
りのをしけをうとぬれて
おりひ出せるそ尊し

文政八酉年卯月廿八日

八染菖 画

英佐古集　坤

前書ハ前ニ略ス

秋舟乃川縁のすむ舟の屋ら哉

茫それ毒のこみ曲る小家可鍵

宇こひまゝれきらんいひ身ぬ宿の秋

春の月乃わしすゝ小ほとゝ　このまゝ

みとかけす行おもく草のおれ哉

春はさ咲しうらゝかなる日和
しのゝく暮し夜とも九夫ゆかり
椙と思ふ我か心す那
くるしくとも見むれ尓礒しらぬ
秋手ぬき清ふ風く人すあさ寺り
のひとこるやうかうひぬめ言
言郷の新年近の上ナ之年

地は蔵天あまつ神のため膝やすからん
草木もしれ花てあるとき秋月
花月や鶯あく草の花
酒携車ひきより御合議
春ておかすまく行之先しまて
梢の中ちう雲继る田中庵式

文政七年春二月

桜の花さかりなるころほひのあり
まねせし浦山ならし柳の梢
燕飛かひ通ふる庵に入
籠りしも宮さして御はし将
縦横ならし錦飛ハ移より繪
若乃頃さく飛浦常なけれ波成
人々も多く無き大方此花なり

近江の國よりきたる浦人の流
折しも花の林をよけむつまてゆかしけり
将軍の御たちよせ花の宴の末
花紅のほとりにて南枝の花
咲も雛の飛しくさかり夜に帰
某所の殿にて御たちかしの山家の梢
袖をかりて物語に帰り川をし

八拾人あまりに打ふして也とまなり
龍安寺あらまし元源の源
まさしく昔の世ニ清盛家
家の栄をほこれは平家物語
さみしきや御事を待ちわびて
館を出よ小島ひとつを立退にも
清衡や秀衡の山とふそ鎌倉の城

松島しるこしもひとし峯の高峰
鹿の山果て萬事湘を秋鍋の郷
眺るしや見てる見事の秋
西ノ宿の杜衰たる谷寒し
松しるこそ斜るかくの野菜衣
名ノ丁のまのの出来る住荒木
あ給のそとれ本雨も月のろ経

菊もとて硯よりおもかりけり
よろつ代の蔵乃こゝろむ柳の露
菊えも我楽しみ秋とへの秋たとへ
咲残の花やまし冬の香を緒連
としあらしも菊て砂されて菊葉のあかり
今高代喚文字流ふの花小ふうの後
四よの松小句行のあかれ為尤とし年

宵月やまだ秋よりも花にほいけふも哉
さもやはまゝ露けも村小小面をみれ

右

拔萃

梅園雪旅 （花押）

右附之段委乎伴之

霰もりぬるくもれし大簾
薄縞としつんく〳〵忍る柳の糸
まそおやすさ押さしぬるせうすゝき
比翼をくりて艪えくおしく蝸牛
火中ゝ家々芒のとりへの秋
しくゝぬ家まぬ向ひし山乃尾
ゝ独りゝ本や碁ぬつてそぬる於樓之

元の宿の何穂えるむ我秋
紳まりとて海藻も春めきけん人ぞ
昔思ふぬちまくしとならえにぬる也
螳の姿やり縫つむ飯ゑのを之
糸ゝけへけさうし出ぬぬ落雲
檜の咒り利通てまし河の月
了滑しふやしまりもすゝくゐ那ぬ秋

ゆふ霧や身の日和をとらしむく
懶く西行乃てらける枕一の事
雷や風呂なき宿はひとこそいけり
　ほとゝぎすの啼きてさぬと
　いつまでも老眼し目利つゝく
青さしたりし梢より哉
一茶

菅の根の長しと思ふ夜のあけかな
西の紅葉秋は川明にたちかな
舞鶴の花桜えてりきみ紙
春たつてさきらきしてきの川
いざ川も我子共といふと紀
あさの葉のはなぞものかり首と
茶の世わ何の為ぞ奴
蘭山

御[illegible]は歌の[illegible]ひや[illegible]の[illegible]

花乃庭も[illegible]山の月雪の[illegible]

[illegible]の[illegible]をも[illegible]のみ[illegible]

さは[illegible]のと[illegible]書[illegible]

なくの[illegible]も[illegible]の[illegible]

出[illegible]の[illegible]

き[illegible]の[illegible]九月書

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]湖[illegible]

風乃窓[illegible]花の[illegible]

[illegible]露

筆[illegible]之

まつしまや宿乗合せて橋代

梅さしてものゝ何とかすゝめ[illegible]

此て情ありと感ぜし

此きの月より澄ぬき芒すゝき

とうつして寝ありと梅あり　諸意?

超然　卑も説?も

鈴鹿?は見えて捜すや舟切り

まかせ言葉に川となれは?

これりやうお哉心しましいそう?

新年の口紙とめて粘りに赴る?

行年を得十二歳?須興に咲きてみえ

ゝ時乃れまれて常に禾?お深く?

何事も御?簾を行ともを祈?迄

尚志白物何か安心?

冬の前をいのらきのちとれ行時ま

とよ寝とり中に眠り

月さしてにく花前後の中や拾をつゝ

も旅をうつすも乃心寂あるか?

されたり　[illegible]

蝶夢?

湖水中にも見る面影はうすの月

湖水に絵の中にも半如く見えし

志ら魚は勝れたるの蒸す那

魂中にまりし弾指の身もへ何日んれ

やうさやき書類してひとつ端

其の事は時代あり真の秋

二日月られしきものかたつなし

一

花月の行もしかのしきなる人

流れ年衆遠きものゝまゝみらず親

越をこえ家をこそ義の家

宿かりし嘆てこすもしもうれ

余人も紅ここちのえくての月こそ

なし

眼とうつし人も花の落
海のまたかたて絶てなし竹路
鏡よ蛍おれもしうれ侘
雨の音聞える気れさし甚深
明月や雲ありの細き舟

安甲乙
卯年

芳蔵

京都の蓮生人四極山うち越て道にて
しまし何かうもあひやしまし

家のこ小野篁の歌のめ哉
はる風やつゝ梅の香花あちの
今ひとり有家の行かり月
何のぬり浅緑つくる糸かり
春もしと漂ふる人のまよひの
月さしぬ世のものもあはしはつまれ

夜ふ鈴まてても起てさも茄子
すのりとさく螻乃あまみる那
かしこきは物あらまうる火とり虫

一樵撃波大

虚空

随斎

はしうれは山路しく露の雨
うきくさの中のし涌や野の雪
ましろや白露の華ゝ目みえし
能して来つ精なるし寺の飯
辛労の窩ぬけし白ふ礼
鯛の腑し針さし人よ秋の色
二日ゆきてやし人をるもかすよかし

あきの月ハますミもまさりつゝ時ふ
此ものこ数山とてもうかりし名月
新さんや源氏もゆかる石松
平家島了峨の中にて様よう船
所の月山と輔く後ハ湖も可
高ほ一つしまんりし閑居
筆跡ともかくの辺舟ましくて
唯歎かもちのこ

文政三庚辰
源氏中ののる
三厩りまゝ
ま新修のちつ和唐代輔しるれ
とくしもうちなりしのる

松窓老漁

えりぬきてゐくかり　滝の音
降しく雪ハ日のさしけきの桂尽ぬ
桜の華ぬきしける結屋の社より
花をも追て更何あそびもしらむ
むさしのゝやまて霧のゝさしか山の冷
きれ松ぬやる雀ら軒のゐる
古くもやしてぬゝふの絹ハ影え

春くあひて叢菜をよりさらり雪ふる
菖蒲河やまきさうらぬる庭の紗
樓閣の更しを追てや五月雲
夫節しぬ夏月に頭にハしけり
庭汁松深山ハ東叟ぬ團扇
蚕顔ぬ尾いてし杖に枯きもる
まるゆき基懇秋とくるもハ汐明り

切葉てありしりおまつく残早く
八月や人のこそみる山の松
志ら雲はのほるまつかる月夜哉
姫か出しうむのへ(ちち)秋の山
わりもとさるとて立つる九月かな
十月のおりまのうる花の角
菊澤やさ出比松姫くかくしく之真

出し、桐津寺門家や名前衆
雁かもとれ庭てゆく姫かり
志ら雲ゑ船すんやとの松々のみ
雁続しわるく来出山の松
起よ浦なすりうか頭巾で

やうなむかし伊勢の標堂尾張の
士郎ハ句評ともに宗匠を経て
留守にしやる文ハ中ころの書
御はた申はりのみ何とハいよ
度ハ及て又くるし又くるしくて又
ことなる一来夫されよりて筆をさし
おく二度か三度ハ三四度かく
人の心より出し世事いふこと云
めくらし時をまかしくのも

をさなきころハおもて句のかれこそ云
のへぬるとて見あるまきれにやまとまろ
しなへハ絶し大宗といはし
歴ハまろしくやまと絶しりん
やまとうしも前ハ絶しらは
とうかやうハ元あるはともあるか
是流也かとの人言ふ紀しあら
りのまあるへくを印もこきさき

ヒカク
可成

1164
歌俳百人撰
ア1,500

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十一[illegible]

[illegible]